

教師の底力

それでも教師を続けてます

先生たち、いま学校は楽しいですか。子どものことをかわいいと思えていませんか。同僚や保護者との会話は楽しいですか？「子どもを変えなければ」と考えるあまり、周りの大人の目が気になつたり、思つようにはいけないことで教育実践やあり方に悩んでいる人、壁にぶつかり、孤独を感じ、もう辞めてしまいたいと思っている人もいるかもしれません。でも、そんな中でも、誰かに、何かに支えられ、子どもと出会いながら、それで教師を続けていこうとまた歩き始めることがあるのではないか。教師という仕事を続けるエネルギーはどこから生まれるのでしょうか。特集では、悩みながらもなんとか頑張つていて、そんな人たちと一緒に、教師という仕事を生き様について考えてみたいと思います。



座談会

教師として生きてきた私たち

教師の働き方改革が話題になり、学校現場の働きにくさがクローズアップされる時代の中、それでも粘り強く実践を続けている現場の教師は何を思い、考えてきたのでしょうか。つらさや悩みと向き合い、それらを乗り越え、今を生きる生の声をお届けします。

あきら 今日は、中堅の先生方に集まつてもらい、自分が教師として歩んできた道のりについて語り合いたいと思っています。今、教師になりたい人が減り、学校現場では、事務仕事が増え、子どものことを考える時間が減り、ギスギスしたことを感じます。でも、僕の原点なんです。子どもが自分のねがいを実現した時の笑顔、これが発達するということなんだとつらさを経験しつつ、それでも教師を続けてきたのではないでしょ？

しんじ 僕は、もともと保育士になりました：大学を卒業して数年間、保育園で働いていました。そこで経験はとつてもら貴重で。今でも僕の原点なんです。子どもが自分のねがいを実現した時の笑顔、これが発達するということなんだとつらさを経験しつつ、それでも教師を続けてきたのではないでしょ？

あきら 今日は、中堅の先生方に集まつてもらい、自分が教師として歩んできた道のりについて語り合いたいと思っています。今、教師になりたい人が減り、学校現場では、事務仕事が増え、子どものことを考える時間が減り、ギスギスしたことを感じます。でも、僕の原点なんです。子どもが自分のねがいを実現した時の笑顔、これが発達するということなんだとつらさを経験しつつ、それでも教師を続けてきたのではないでしょ？

あきら 今日は、中堅の先生方に集まつてもらい、自分が教師として歩んできた道のりについて語り合いたいと思っています。今、教師になりたい人が減り、学校現場では、事務仕事が増え、子どものことを考える時間が減り、ギスギスしたことを感じます。でも、僕の原点なんです。子どもが自分のねがいを実現した時の笑顔、これが発達するということなんだとつらさを経験しつつ、それでも教師を続けてきたのではないでしょ？

登場人物



あきら先生（司会）



しんじ先生



あすか先生



ひろみ先生

教師歴16年。これまで知的障害児教育に携わってきたが、最近、視覚障害児教育の現場に異動し、とまどう日々を過ごしている。

教師歴18年。学生の時に参加した障害のある子とのサマーキャンプをきっかけにこの世界に足を踏み入れることになった。

教師歴22年。最初に出会った肢体不自由児教育に魅せられ、以後、障害児教育にのめり込む。

教師歴25年。就職氷河期で同期の世代が少なく、先輩ばかりの学校現場で教師としての人生をスタートさせた。

あきら 理想と現実のギャップ、ありますよね。初任者の時は、とにかく必死に子どもや保護者と関わることで、少しずつ楽しさを感じるようになっていく。それが長く続ければいいのだけど、10年くらいいると職場での立場が変わり、いろいろ

あきら その感覚、よくわかるかも。私は、初任者として肢体不自由校に配属されて、いきなり、訪問学級の担当になりました。緊張しながらも、ただただ子どもとともに過ごすことが楽しくて仕方なかった。でも、その後、知的障害児学校に異動して、学校に行くことがつらくなつたな。自分が子どものことを理解するだけの知識とか理論がないことを痛感させられて。同僚の先生との関係もギスギスしちゃって、朝からトイレで泣いてしまったこともあります。

ひろみ 学校で仕事をしていると、同僚や管理職とぶつかったり、対立したりして、誰も自分のことを理解してくれないって感じることがあるよね。私もつらいことはたくさんあつたけど、不思議と「辞めたい」って思うことはなかつたなあ。もしかしたら「いつでも辞めてやる」っていう思いで、開き直って仕事をしているからかもしれないけど。

あきら うんうん。そんな時あるよね。今の私だったら、そんな思いを抱えた同僚を絶対に支えたい、つぶさないぞつて思つけど、当時の私にはむずかしかつたかな。でも、「支えたい」って今、思うのは、つらくて学校に行きたくない自分を見守り、ことあるごとに飲み会に誘つ